

亀岡フィールドステーション

亀岡フィールドステーション活動概要

亀岡 FS に籍をおく大西、豊田、原田、河原林は、研究者が地域の問題に実践者として向き合い、地域住民とともに克服していくという安藤が提唱する「実践型地域研究」の概念¹⁾を具現化していると言えるであろう。

大西は、生物学者として地域と野生生物の共存の在り方を研究しながら、亀岡市保津町自治会の『保津川すいたん農園「いきもの共生」でまちおこし』という活動を地域住民とともに実践している。

豊田は、船頭という視点から大堰川（桂川、保津川）の支流・清滝川の水運と観光という視点から、愛宕信仰を起因として形成された清滝集落を研究している。研究の地として清滝と向き合っていた彼だが、祖先の地である清滝の過疎化による集落存続の危機を目の当たりにし、集落存続の問題を自らのアイデンティティの喪失と同義と位置づけ、その解決への実践をライフワークへと発展しつつある。

原田と河原林の研究対象は、保津川流域で実施されている「保津川筏復活プロジェクト」（以下筏プロジェクト）である。原田は、河原林とともに筏プロジェクトを実践しながら、経済学者の視点から地域の問題と筏プロジェクトの意義を研究している。河原林は、保津川で生きる船頭という立場から、地域の問題に向き合い、筏流しのイベントを通して、地域資源、地域問題を地域住民と結びつける活動を行っている。二人は同じ問題意識と目的を持ちながら、その視点の違いが興味深い。

ここで、各人が提唱する地域再生モデルを紹介し、亀岡 FS モデルへと展開してみたい。



亀岡 FS の活動地域（河原林作成）

大西、豊田、原田、河原林の地域再生モデル

- 1 大西：他の生き物も共生できる安心な農作物を作り、土地の恵みを感じるという暮らしの提案
- 2 豊田：故郷衰退化での現住民と離郷者の関係性の再構築による再生視点とアイデンティティの覚醒
- 3 原田：河川管理における伝統的な水運業のレジティマシー（正当性／正統性）の再生
- 4 河原林：地域の歴史的環境¹⁾の新しい価値観²⁾の共有による歴史的環境の諸問題の克服と未来像の創造

亀岡 FS モデル

地域の既存の価値観と新しい価値観を融合させ、地域の問題を超越し、新しい地域像を創出する

最後に、これまで私たち4人を支えて頂きました地域住民や関係者の方々にこの場を借りてお礼申しあげるとともに、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。（河原林 洋）

参考文献

1) 安藤和雄 2010「実践型地域研究に関する覚書」鈴木玲治編 2010『ざいちのち 実践型地域研究中間報告書』京都大学東南アジア研究所 実践型地域研究推進室：1-5

¹ 歴史的環境とは、地域において、景観、風俗、習慣、様式、技術、価値観など、継承・発展してきたものの総称として使用する。ここでは、保津川の筏流しの伝統技術であり、保津川の自然、景観、文化と言える。

² 従来の木材を運搬する技術という価値観ではなく、筏流しイベントを通じて保津川を体感する術（すべ）とする価値観。